

神戸女学院大学女性学インスティテュート主催

## 2019年度「特別講演会」実施記録

2019年4月26日(金) 10:35~11:25、於：神戸女学院講堂

◇小檜山ルイ（東京女子大学現代教養学部教授）

「アメリカにおける女性とキリスト教―抑圧とエンパワメントの間」

アメリカ合衆国において、キリスト教はジェンダー構造に大きな影響を与えてきました。ある時点までは、それを決定づけたと言っても過言ではありません。フェミニストの立場から見ると、その女性への影響は両義的でした。

キリスト教は、女性に対して大いなる公的活躍の可能性を開きましたが、また、大きな抑圧の種ともなりました。では、どのように可能性を開き、どのように抑圧したのでしょうか。本講演では、「長い19世紀」に焦点を置いて、この疑問に解答してみようと思っています。

※告知文より

神戸女学院大学女性学インスティテュート主催

## 2019年度「連続セミナー」実施記録

【第1回】 2019年6月7日(金) 14:00~15:30、於：ジュリアダッドレー館 JD-104

◇大澤 香（神戸女学院大学文学部総合文化学科専任講師）

「キリスト教における母なるもの」

キリスト教の神には「父なる神」のイメージが強くあるように思われるかもしれませんが。しかし、人類の母エバ、族長時代の母たち、女預言者たち、イエスの母マリア、イエスの女性の弟子たちなど、聖書の中には印象深い女性たち・母たちの物語がたくさんあり、時には神が女性（母）のイメージで表現される場合もあります。多神教世界の女神との関連なども含めて、複数の側面から聖書とキリスト教における母なるものについて考えてみたいと思います。

【第2回】 2019年6月14日(金) 14:00~15:30、於：ジュリアダッドレー館 JD-104

◇栗山圭子（神戸女学院大学文学部総合文化学科准教授）

「天皇の母たち」

地方における公務、2019年4月にせまった退位などに関して、明仁「天皇」と美智子「皇后」に関する報道を目にする機会も多いのではないのでしょうか。現在、天皇家の女性というと、天皇と皇后＝夫＋妻のペアを思い浮かべることが多いのですが、歴史的には「天皇の母」が政治力を持ち、大きな影響力を及ぼすことがありました。本セミナーでは、そうした「天皇の母」の政治的位置や役割についてお話ししたいと思います。

【第3回】 2019年6月21日(金) 14:00~15:30、於:音楽館 合奏室

◇松本薫平 (神戸女学院大学音楽学部音楽学科教授)

「オペラの中の母たち」

様々なオペラの登場人物の中から母親役に焦点を当て、映像を観ながら紐解いていきたいと思います。具体的には、モーツァルトの「魔笛」(1791年)、ヴェルディの「イル・トロヴァトーレ」(1853年)、フンパーディンクの「ヘンゼルとグレーテル」(1893年)、マスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」(1890年)といった作品を取り上げます。

【第4回】 2019年6月28日(金) 14:00~15:30、於:ジュリアダッドレー館 JD-104

◇國吉知子 (神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科教授)

「現代家族の中の母」

相互交流療法(PCIT)は、かんしゃくや暴力など幼児の問題行動の改善に非常に効果の高い心理療法です。PCITでは親子の交流(やりとり)を観察、精査し、悪循環(コミュニケーションパターン)を見出すことで治療につなげていきますが、そこでは親子間のパワーゲームも多くみられます。PCIT事例を通して、現代の親役割の揺らぎの共通点と、普遍的な“母性性”と“父性性”について考えたいと思います。

※告知文より

神戸女学院大学女性学インスティテュート主催  
**2019年度「女性学研究会」実施記録**

**第5回 女性学研究会**

2019年6月6日(木) 16:40~18:10、於:文学館L-8

◇吉原真里 (ハワイ大学アメリカ研究学部教授)

「親愛なるレニーへ レナード・バーンスタインとふたりの日本人」

20世紀アメリカ音楽のシンボル、レナード・バーンスタインの、熱烈なファンそしてサポーターとして彼を支え続けた、ふたりの日本人がいる。ひとりは、1947年からファンレターを書き続け、人生のさまざまな段階でバーンスタインへの愛情を心の支えとし、彼の活躍を見守った女性。もうひとりは、1979年のバーンスタイン来日時にマエストロと出会い、以後数百通ものラブレターを送り、やがてバーンスタインの日本代表となった男性。ふたりとバーンスタインの関係を通じて、「世界のマエストロ」の誕生、「ファン」のジェンダー的意味、バーンスタインの性的アイデンティティなどを論じる。

## 第6回 女性学研究会

協力：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター

2020年2月26日(水) 15:00～17:00、於：文学館 L-8

◇水垣源太郎（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

「ジェンダー平等のための社会技術へ——参加型アクションリサーチの実践例から——」

社会技術とは、社会の抱える諸問題に対応した研究開発に際して、社会的文脈に配慮しつつ実装し普及させることに重点を置く技術思想である。これを実現する社会調査法として、参加型アクション・リサーチがある。これは社会的課題の解決に向けたコミュニティと専門家／研究者との協働による調査研究法であり、2000年代以降、公衆衛生や地域保健、貧困・コミュニティ開発などの分野で本格的に発展してきた。

本報告では、奈良県中山間地域での高齢化コミュニティ支援の実践例から、社会技術の思想と参加型アクションリサーチの方法がジェンダー平等と女性のエンパワーメントにとって有効であることを論じたい。

◇奥野佐矢子（神戸女学院大学文学部准教授）

「学校における＜ジェンダー平等教育＞の現在」

今日の日本では、ジェンダーをめぐり、さまざまな見方や主張が錯綜している。先進諸国の中でも圧倒的に男性優位の社会とみられるこの国で、これまで性差別といえば女性差別と見なされてきたが、近年「男の生きづらさ」も盛んに語られている。また平成27（2015）年には文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を发出し、性的マイノリティへの関心も見出されている。この国のそれぞれの「生」が「性」をめぐって抱える「生きづらさ」をわずかでも軽減するために、教師ができること——決して簡単ではないこの課題と向き合うための見取り図を示し、現場の取り組みなどについて考察する。

※告知文より